

土俗より見たる日本の民族

中山太郎

閣下竝に諸君、私は無名の一學究でございまして皆様の前で御話を致すやうな知識も亦見聞も無いのでございませう。先般本會の長井學士が見えられまして、當學會に於て何か私に話をせよといふことでございまして、獨り見聞が狭いばかりでなく此春中から神經衰弱といふ病氣に取付かれまして、最も好んで居ります所の書物にも近付くことが出来ず、隨て記憶も悪くなると斯ういふやうな譯で、何等御話申上げることがないのでございませうが、折角の事でもございませうので先刻加藤博士が御紹介下さいました土俗の方面から見た日本の民族といふことに就きまして、暫くの間御清聴を汚したいと思ふのであります。

土俗といふ言葉は随分日本では古くから用ゐられて居りますが、其内容に至つては洵に漠然として居るのであります。英語で申しますと Ethnography とでも申すのでございませうか、さういふやうな風の意味に私達の仲間では取扱つて居りますので、どうぞさういふ意味合と御承知置きを願ひたいのであります。特に私が今晚日本民族の題目を選んだことは、御承知の通り輓近學界に於きまして日本の民族―即ち吾々の遠い祖先は何處から來たものであらうか、何時頃來たものであるだらうかといふやうな民族の研究といふことが非常に學界の注意を引いて居るのであります。勿論民族の研究には色々方法がございま

す。先づ申上げるまでもなく昨今頻りに文獻の方面から研究して居られますのが歴史地理學會の喜田貞吉博士でございます。此御方は歴史家の立場として日本民族がどういふ風な所を経て、どういふやうな人達は何處から來たのであらうかといふやうな事に就て専ら研究されて居ります。次は白鳥庫吉博士でございますが、此御方は専ら言語學の方面から日本語はウラルアルタイ系のものであるからといふ見地に立たれますして、日本民族の研究をなされて度々御意見を史學雜誌其他の雜誌で御發表になつて居ります。又是等ご趣を異にしました研究方は遺物遺蹟の方面からの研究です。是は御承知の通り人類學會の鳥居龍藏君を始め、其他考古學會の高橋健自君中山平次郎君など専ら遺物遺蹟若くは先住民族が遺されました品物に依つて研究されて居ります。ところが是は皆これも是も御尤もなことで文獻の上より研究するのも、遺物遺蹟の上から研究するのも、亦言語學の方面から研究するのも、結構な事でございますが、それと同時にどうしても日本の民族の本當の事を知るには私達が研究といふと鳥辭がましいが、常に注意して居ります土俗の方から研究するのも一つの研究方法ではあるまいかと思ふ。ところが土俗といふことは日本人には閉却されて居る。今晚御集りの御方々にはさういふ御方はありますまいが、多く土俗といふことを申上げますと、どういふことかと反問されるのであります。それで土俗とは何ぞやといふことを御話しなければならぬ。今晚私は土俗といふことの定義より御話申しますのは省くとして、此閉却されたる土俗より日本民族の研究を企てるといふことも相當のことではなからうかと信じます。若し土俗といふものが一つの學問として

獨立することが出来ないとしても人類學なり考古學なりの補助學として、相竝んで日本の古代民族を研究する一つの槩になりはせぬかと斯ういふ考で土俗といふ方面から日本民族のことを御話しやうと思ふのです。

私が申上げるまでもなく日本民族即ち吾々の遠い祖先、何百年若くは何千年の前の遠い祖先の間にいろ／＼の民族が日本に居つたといふことは如何なる點から見ても争ふ餘地はないので、極めて明白な問題であります。文獻の上に現はれたものを數へても古事記、日本書紀などを見れば先づ九州の方に於きましては隼人若くは熊襲、近畿では、唯今でも吉野に名殘を留めて居ります國栖、又日本の凡ゆる土地に分布されて居るアマベ俗にアズミ、信州の安曇郡の語源をなしたアズミ其他北海道に遺つて居るアイヌ、ヤマズミ、佐伯、常陸風土記などを見ますと野之佐伯山之佐伯とある、其外コシ、即ち越後越中のコシ族、出雲のオロチ、所謂オロチヨン族などがあります。御承知の通り土蜘蛛、オロチ、八束脛といふものは文獻の上にも明かに現れて居るものであります。此外新撰姓氏錄といふ萬多親王といふ方が御作りになりましたものは近畿京都を中心にして日本に其當時住んで居りました民族の苗字を集めた本であります、是も學者の間に色々説がありました。唯今遺つて居るのは原本でなくて抄本であるといふ説がありますが、それは姓氏錄の研究でありますから姑く措きまして、兎も角も新撰姓氏錄に依れば三千一百種の神別皇別番別と分れて居る。皇別は 天皇から別れた氏族、神別は天神地祇から別れた氏族、蕃別は支那

朝鮮其他の諸外國から歸化した氏族と斯う三つに分れて居りますが、蕃別が三千一百の半分以上を占めて居るのであります。是等は御承知の通り文獻に現れたものであります。

ところが更に遺物遺蹟に現れたる中にも銅鐸を遺した民族がある。是は今日でも學界のエックス民族といふものになつて居りまして、去る八月の歴史地理に喜田博士が論じて居られますが、矢張り依然として明白を缺いてゐる。御承知の通り銅鐸といふものを 天智天皇の時代に近江の國から掘出したが何の爲に使つたか分らぬといふことが書いてございます。今を距る千年以上の 天智天皇の時代に於て既に銅鐸といふものが如何に使はれたか、之を使つた民族はどういふ民族かといふことは不明である程古いものであります。此銅鐸といふものを使つた民族はごういふ民族であるか、兎角の説はあるとしても今に判然致しませぬ。が日本に居住して居つて相當に繁榮して居つた民族といふことは明かであります。何となれば銅鐸は東は三河を境にして西は中國南は四國にまで分布されて居りますが、九州にはありません。東は三河から西は中國南は四國にまで互つて各地から發掘されますが、それ以外には出ないのであります。出ないにしても其地域内に於て繁榮して居つたことは言ふまでもないことであります。

次に數ふべきは銅矛銅劍の民族、銅を以て劍を造り矛を造つた民族です。然し斯ういふやうなことを並べ出すと可なり多くあるので大概にしますが、最近私の友人である西村眞次君、古代の船舶ばかり研究して居る方ではありますが、同君の古代船舶考を讀んで見ますと、船の方面から觀察した日本の民族は兎も角

も七種あるといふことです。第一は瓢船、瓢箪でございませぬ、瓢箪を船に使つたもの、是は神功紀に皇后が三韓を征伐する所に書いてございます。即ち船の周圍に瓢を附けて三韓に進んだといふことがございます。此瓢といふことに就ては面白い話がありますが、餘談に互りますから略します。此瓢の船を使つた所の一つの民族、それから葦船、書紀の神代之卷などに蛭子尊を流したといふ葦船、それから釘を船に使つた民族、龜甲船、龜の甲の船、能く浦島太郎が龍宮に行つたといふことがありますが、あれは何か龜の甲に乗つて行つたのでなく龜の形をした船であつたさうであります。紀州の熊野其他にもありますが、諸手船テボネといふのがございます。さういふやうな船の方面から見ても兎も角も變つた民族が七種ほどあるといふことをいつて居るのであります。此他にまだ、古墳などの方面からいひますと、阿波式の古墳とか、堅穴、横穴變つた様式を取りましたものは悉く變つた民族であらうといふことも言ひ得るであらうと思ふのであります。

又人類學的に日本の現在の民族を見ましても、頭の測定若くは骨格の測定といふやうな方面から考へても、變つた民族が混成されて今日の日本民族が造られて居るといふことは立派に證明の出来ることであります。現に昨年から本年に掛けまして京都大學と大阪毎日の社長山彦一君と前後して發掘を企て大和河内から發掘されました遺骸はそれ、専門の學者の鑑定に依ると少くも二千三百年の前のものに相違ない、そして是は大阪高等醫學校の大串博士が研究された所に依るとアイヌでもないといふことであります。

す。又最近京都理科大學の紀要として出ましたものには濱田青陵氏が圖まで添へて精しく書いてございます。斯ういふ風に近年遺物遺蹟其他の方面から變つた民族があるといふことは立派に證明されるのであります。

土俗の方面からどういふ民族が日本に居つたか、といふことをいひますと、先づ最近に御断りして置かなければならぬことが二つあるのです。それは土俗の方面から見ましても斯ういふ變つた民族があるといふことだけははいれますが、それでは其民族が何處から來たか、然して渡來民族が日本の先住民族とどういふ風に渾成されたかといふことは避けたいと思ふのであります。それは御列席の御方の御耳に障る所があるといひませぬから、それ等は論じて断せず説いて精しからざる所があるか知れませぬが、まだ日本の現代では、はつきり言得る自由を私達が有つて居らぬ、其邊は豫め申して置きます。此間も栃木縣の神職支部大會に於て神様の御話をして大變神主連中から不敬呼ばりをされた譯で、成るべくさういふ問題には觸れたくないので、洵に靴を隔て、痒きを搔く氣味がございませうが、暫くの御忍びを願います。次は比較土俗の方面と、土俗と時代の推移といふことです。是等は逆も短時間では申上げかねますので略したいと思います。

先づ土俗の方面から第一に注意すべきは御祭でございます。神様を祭るといふ方面にどういふ變つた形式が現れて居るかの問題です。全體土俗といふことを微妙な細かい所まで御合點が行くやうに申上げます

と、一つの問題でも猶ほ二時間三時間位申上げなければならぬので、巨細に就ての論斷は兎も角として、御祭の方面にどういふ變つた様式が現れて居るかといふと、是は先般神道談話會でも申しましたが、其席には加藤博士も多分御出でございました。私の考へる所では古事記若くは日本紀に現れた日本の神道といふものは後世になつて書き現はされたもので、あれが日本の本當の原始神道ではない、決して吾々の遠い祖先があゝいふ信仰を有つて居つたのではないと信じてゐるのです。一例を申上げますと素戔嗚尊の御作りの八雲立つ出雲八重垣といふ歌と應神朝に韓國から日本に歸化した博士王仁の作つた難波津に咲くや木の花冬籠りの歌を比較すると、年代の上から申しますと何千何百年といふ隔てがありますが、歌の姿、歌の心持、言葉遣ひ等全く同じでございます。斯ういふやうなことは何方か間違ひで、素戔嗚尊の歌が間違ひか王仁の歌が間違ひか、何方か間違ひでなければ時代錯誤に陥る外はないといふことが出来るのです。それで日本の原始神道に就てもいろ／＼考を有つて居りますが、多くの國學者、多くの神道者は吾々のいふことを容れて呉れない。中山の研究は薙研究だといふのであります。それはどういふ譯だと聽くと、薙のやうにそれから皮を剝く、さういふ神道の研究の仕方はいかない、皮を剝かない方が宜い、其儘に神道は研究しなければならぬ、薙のやうに皮を剝くと縊縊が出る、新しい疊でも叩けば塵が出る、神道でもいろ／＼塵があるから叩けば塵が立つ、さういふ研究は宜しくないと一部の國學者の人達は私の研究を評して居ります。兎も角も餘事は扱きまして、原始神道に幾つもの流れがあつたことは明白

で天兒屋命の神道が天太玉命の神道と同一でなかつたことは何人も認めるだらうと思ひます。御承知の通り延喜式に遺つて居る祝詞などを見ましても、あの中で三つ程變つたものがある。第一は鎮火祭と廣瀬龍田の神に獻るべき祝詞、第二は祈年祭の祝詞は全然形式は同じであります、それに含まれて居る思想は異なつて居ると思ふ。最も簡單に御合點の行くやうな例を引きますと、鏡を以て神體とする神道と幣を以て神體とする神道とは違ふだらうと私は思ひます。鏡が日本に何處から傳へられたか、是に就て吾々特に注意しなければならぬのは最近大和國から燧鑑といふものが發掘されたことであります。本年の五月でございしますが、只今は京都大學に保存してございします。是は周禮といふ本一偽書といふ説がありますが、周禮の冬官考工記の中に燧鑑のことが書いてございまして、此鏡は兎も角も文字の示す通り天にある火を取る爲に用ゐたものでございします。是と併せ考ふべきことは今の義解を見ますと火燧珠といふものゝあることです。是は其當時火取玉と讀みました。是は正倉院の御物に今日遺つて居ります。御承知の通り此問題については唯今日光に居ります古谷清氏と紀伊の南方熊楠君と考古學雜誌の上で辯難攻撃烈しく相戦つたことでありますが、兎に角日本に古昔、天火を取るべき燧鑑のあつたこと、同じく天火を取る所の火燧珠のあつたことが分ります。

それから鏡といふものを神體とする神道と幣を神體とする神道と明かに違つた思想と言ふことが出來やうと思ふ。更に言ひ得べくんば鏡を神體とする神道は天孫民族で、幣を神體とする神道は先住民族、即

ちアイヌの神道かも知れませぬ。アイヌが今日使つて居るイナオは幣と全く違つて居るとはいへない。次に注意すべきことは同じ神道でも標繩といふものを神聖視した神道も一種別な思想であることです。

是は精しく申し上げますと多少の面白味がございしますが略します。尙ほ此際注意すべきことは日本の原始神道はシャーマン教からどういふ影響を受けて居るかといふことであります。今日はシャーマン教の研究も進んで居りますが、現に蒙古の方に残つて居る樺太の北の方にも残つて居りますが、シャーマン教といふものは日本神道の研究の上には見逃すことは出来ぬと思ひます。尙ほ注意すべきことは古墳の上に神社を建てる民族が日本にあつたのであります。又これと反對に古墳を避けて、或神様が御降臨をなさる、神様が鎮座をなさるといふ所に神社を建てた民族があつたことです。前者は熱田の神宮の如き、御參拜の方は直に熱田神宮が立派な古墳の上に立てられてあるといふことは分るのであります。更に東三社の一なる香取、尤も香取といふ言葉がアイヌ語ださうであります。古墳の上に神社が建てられて居る。更に信州の諏訪神社なども一大古墳の上に神社が建てられて居る。古墳の上に神社を營造するといふ一つの民族とはは後に申し上げますが、古墳を非常に嫌ふ民族があつたと私は斯う思つて居る。

第二に考へて見なければならぬことは、日本の最も古い神様は何であつたらうか、私は狩獵神であると思ひます。山で獵をするか川で漁をするか、獵の神様が古くあつて次に穀物の神様が出来た。日本に穀物が古く無かつたといふことは古事記を讀んで見ましても書紀を讀んで見ましても、何れからか持つて來た

といふことは明瞭なことで、それと同時に穀物が無くても人間は住んでゐたといふことも亦明瞭なことであります。それでは何で生命を保つたかといふと、最前申しました通り山で獵をするか川で漁をするかして生活した。隨て之を神として齋き祀るといふことは明かなことであります。それ故に我が國には狩獵神は非常に多いのです。信州の諏訪神社なども祭神は今日は建御名方命といふことになつて居りますが、あれは建御名方命が祭られる前に諏訪神があつた、それは狩獵神である。獵の神様が建御名方命が這入る前に何百年か何千年か前からあつた。其後とへ建御名方神が這入つて今日では諏訪神となつて軍さの神となつた。是は軍さの神様などといふのは大間違ひで決して諏訪神社などは武神として祭るべきものではないと思ひます。是は一遍申述べたことがありますから略します。日本の國に古く澤山の動物が居つたといふ證據がございますが、雄略紀の條を見ますと近江國に鹿が澤山居つて、遠くから見ると鹿の角が林の如くで鹿の吐く氣が霧の如くと記してある。尤も是は或目的で以て書かれたものゆゑ多少の誇張はありませうが、兎に角に到る所に夥しき動物が棲んでゐたことは疑はれぬ。現に、東京の湯島の妻戀神社などは今日では日本武尊が祭神になつて居りますが、古くは鹿を祭つた動物崇拜に相違ないと信じて居る。動物崇拜に就て注意すべきことは幾らもありますが、それと同時に此事も少し極端の説ではございますが、穀物の神様の殺されるといふ思想が日本にあるのであります。御承知の通り日本の國に穀物を與へた保食神、此御方は記紀共に素戔嗚尊の手に掛つて殺されて、斬られた切口から穀物が出たといふことがある。どうし

て穀物の神様が殺されるのでありませうか、獨り我日本ではかり殺されるのでありませうか、是は世界到處で殺される、是はごういふ譯で殺されるか、後に農業と土俗の御話の時に申し上げます。兎に角殺されなければならぬ理由がある。さういふ風に動物を崇拜すること、穀神を殺す所の異なつた思想がある。

動物崇拜の一例として私が最近発表したものに世間で財寶の神様といふて居る惠比壽といふのは、古く鯨を祭つたもので更に金比羅は其鯨を祭つたものといふことであります。是に就いては反對するお方もあります、私は然く信じてゐます。最近私の先輩である八代國治氏が金比羅と鯨との關係を推測すべき有力な資料を發見されたと云ふて居られました。此の事に就きましては近く發表して御批評を仰ぎたいと考へます。

それから此の場合に併せ考へて見なければならぬことは日本に於けるトーテムの思想であります。餘り日本の國で注意しないトーテムのことを初めて加藤玄智博士が述べられた以來注意されることになりましたが、以前には學界の問題に上らなかつたのであります。ところが吾々がトーテムを考へて見ると澤山のトーテムの思想が遺つて居ります。皆さんも御承知でございますが、日本では神使を祭つて居ることが少くない。春日神の鹿、赤城神の百足、八幡神の鳩、三島神社は鰻を神使とする、是は四つや五つのもではない。此神様の神使といふ者はごういふ意味合のものでありませうか、私はこれは即ちトーテムの思想であると結論をして見たいと思ふのであります。例へば今日でもアイヌなどの土俗を見ますと、己れは狐

の子孫であるといつて狐を、木で彫つた鉢金のやうなものを巻いて居ります。又己れは鮭の子孫であるからとて鮭の形をしたものを頭に載せて居るといふ思想が遺つて居る。是は立派なトーテムの思想であります。更に時代の進化に伴ひまして多少の變化を來しますが、斯ういふやうな例があります。それは作物の禁忌といふことでございます。例へば或百姓の家では玉蜀黍を作つてはならぬ、或百姓の家では胡麻を作つてはいかぬといふことがあります。何代前かに神様が胡麻幹に躓いて倒れて跛になつたとか、何代前に神様が玉蜀黍に躓いて片眼を潰したとか、それから以來玉蜀黍を作らぬといふやうな作物に就ての忌嫌ひといふことも一つのトーテムの變化したものであらうと思ひます。然しトーテムが違ふといふことを以て直に民族が異なつて居るといふことはいへないでせう、最前申しました通り鮭の子孫であるとか熊の子孫であるとか狐の子孫であるとかいふことで直に民族が異なつて居るとはいへませぬが、トーテムを有つて居る者と有つて居らぬ者とは少くも異民族であらうと思ひます。

第三に考へて見たいのは武器でございます。軍人の御方も御出でございますが、土俗の方面から武器を見ると、それは諸學者の間に一定されて居りますことは、伊邪那岐命が天降り座して、游能基呂島にて天沼矛を御使ひになりましたことは記紀共に書いてございますが、此天沼矛は今まで武器と解釋されて居つたのです。更に大國主命が天孫邇々藝に國譲りをなされる時に、八尋の矛を渡した。此矛も即ち武器であるといふことに學界では一定して居りましたが、今日吾々の考へる所では是は兩者とも武器ではなくして

帝王一即ち主權者の標章であると信じます。聊か比倫を失ふか知れませぬが、最近御治定になりました日本元帥が一つの太刀を佩く、元帥刀と同じやうなもので、唯だ一つの標章であつて、決して武器でなかつたといふ其證據は澤山有つて居ります。例へば神功皇后が三韓征伐をした時に携へられた杖は全く帝王の章で、其當時の帝王は祭政一致でありますから、神様の御祭をなし得らるゝ人が即ち國に臨んで民を治める人、帝王の章は一種の祭具であつたらうと思ひます。それと同時に考へなくてはならぬことは弓矢といふものは昔は武士の表道具として、武士道のことを弓矢の道とさえ言ひました。然るに弓矢といふものは程汎稱されてゐたにもかゝらず、其起原は是を持つてゐた者は、日本民族の中でも或特殊の民族より外に持つて居らなかつた、是は皆様御承知の如くであります。それは何であるかといふと、天孫民族は現に天の鹿兒弓とか若くは天の羽々矢といふものを持つて居つた、それ以外の民族は弓矢は持つて居らないのであります。

更に同じく武器の上から見たいと思ひますことは弩です。御承知でもございませうが、群書類從に三善清行の十二封事といふ意見書がございします。醍醐朝の延喜年間であります、此十二封事の中に斯ういふことがあります。神功皇后が三韓征伐の時に弩といふものを使つて、兎に角三韓征伐に成功したのである。是は私共の先輩である西川玉壺君が既に發表いたしました、少くも三韓征伐の時の重要な武器であつた弩は秦の弓月王、大阪府下の豊能郡の秦村に墳墓を残してゐる秦民族の頭領であつた弓月王が傳

へた所の武器であつたらうと思ひます。斯ういふ風に武器の方面から見ましても我日本に變つた民族が住んで居つたらうと思ひます。

第五に考へて見なければならぬことは服飾であります。それが土俗の方面に何う現れて居るだらうかといふと、先づ是に就て思ひ起されるのは日本にある勾玉の思想です。これは從來人類學の先輩であつた故坪井正五郎博士の説などに依ると、斯ういふ風に曲つたのが常の形で（實物提示）、鹿の角の先きをシンボルしたもの、又は鳥の爪を模造したものであるといふ坪井博士の説でありますが、是は私共の承認の出來ぬもので、角の先きをシンボルしたものといふよりは是には非常に深い意味があらうと思ひます。私に考へさせると人間の腎臓だらうと思ふ。さう思はれるのは日本の古い言葉に、心といふ枕詞にムラギモといふことがある。ムラギモのムラといふのは和名抄などを見ますと、腎臓のことをいつたもので有る。ムラといふ言葉を心といふ言葉の枕詞にしたと同時に唯今でも蠻族若くは蠻民の間には腎臓を取て乾固めたものを下げて居る。是は澤山の例があります。曲玉は丁度腎臓を乾固めたものと形が少しも違はぬ。それと同時に日本の國でも心の枕詞にムラといふことをいつて居るのは腎臓といふことになる。さうすると何が故に腎臓を乾固めて吾々の遠い祖先が首に下げて居つたか、腎臓を取らんで胃なり若くは肺なりを取つて宜ささうなものであるが、何故に獨り腎臓に限つて取つたかと考へて見ると、原始民族の間に最も驚異されたものは生殖の問題である。最も不可思議のものとして驚異されたのは腎臓でございます。隨て蠻民の

間に於て腎臓といふものは生殖の源として神祕のものとしてマジックのものとして恐れられた。隨て腎臓の乾固めたものが勾玉の本をなしたものであらうと思ひます。此に注意しなければならぬことは然らば腎臓を取つて胸に掛ける土俗が日本に於て行はれたことかどうか、若くは日本のさういふ祖先が来る前に更に自分の故郷なる土地に行はれた其土俗だけを日本に持つて来たかどうかといふことでございます。是は人類學の上から申しますと日本人に頭の毛が縮れた御方がある。今晚御出での方の中にございましたならば御免を蒙りますが、縮れた毛の御方は異民族でございます。是は今日の學界の間ではニグロ民族であるといふことになつて居ります。ニグロ民族が直接に日本に來る前に足溜り即ち中繼ぎ場として支那なり朝鮮を経て來たのであるが、それと同じやうに勾玉を日本民族が使つたといふことは腎臓から來たものに相違ないが、日本に來る以前に於て何處を經過したか分らぬのでありますが、少くも勾玉は腎臓をシンボルしたものであらうと思ふのであります。

それから尙ほ引續いて起る問題は身體に箭青をする、文身のことです。是も日本の純粹の民族ではない。神武紀を見ますと、利目、裂る目といふ大來目命の率ゐた者等に入墨をした者がある。今日でも琉球人若くはアイヌ人は好んで文身をする。琉球人に至つては例へば結婚をしたから入墨をするとか、若くは神様に御祈りをするに穢れたから入墨をするとか、若くは女として母となつたから入墨をするとか。又アイヌ人なども其通り細君になつた場合に入墨をするとか若くは女となつた場合に入墨をする。北海道廳

などではいろいろ取締を出しますが、まだ根絶しない。甚しきに至ると文身を禁じられたので口邊などは書いて居る。けれども一晚眠つて涎を垂らすと流れてしまふから又次の朝晝くといふ譯で、此文身をするといふ者は日本の純粹の民族ではない。必ずや何處からか這入つて來た異民族であるに相違ない。

まだく服飾から見た異民族に就ては澤山の問題がありますが、略して置きまして殊に注意をしなければならぬことを申し上げますと、肥人といふ者が赤い色を好むといふことであります。肥人と書いてクマビトと萬葉では讀まして居ります。此肥人には異説もありますが、兎も角も赤い色を好んだといふことであります。九州で最も有名なる者としては豊後に於けるシャ一族といふ者、是も赤いものを好み鼻緒なども赤いもの以外には使はぬといふことであります。それから是は皆さんも御承知の京都の附近に八瀬大原女といふ者がある。是も私等にははせると異民族であります。是等は頭に物を載せて歩くといふ土俗で、彼等の土俗はアマベ、最前申しましたアヅミ民族であります。矢張り同じく赤い色を好んで赤い襷をかけ赤い褌を巻き鼻緒なども赤いものを用ゐる。赤い鼻緒でない場合には赤い布片で鼻緒を縛つて居る。彼等の間に行はれて居る斯ういふ風に赤い色を好むといふことは彼等の祖先が或文身を身體にして海に這入つて魚其他のものを恐れしめたといふ古い傳を遺して居るのだらうと私は考へて居るのであります。

それから尙ほ今度進んで考へて見なければならぬことは吾々の著て居る衣服であります。此衣服にもいろいろありますが、手取早く變つた民族だけを申し上げますと、吾々の祖先が着物に就てマジック的の考を有つ

て居つたといふことは是は争はれない。最近京都の文科大學發行の雜誌藝文誌上に米田庄太郎君でござい
ましたか衣服のマジツクの起原といふ論文を三四ヶ月に亙つて書いて居られましたか、それは日本の衣服
でなく世界的の衣服といふものはマジツク的のものが起原をなしたものと云ふことでありましたが、日本
にもさういふ思想が明かにあります。或定められた衣服を着るといふことは神様を祭るなり、若くは選ばれ
た者が着る―靈界の人として着なければならぬといふことは明かです。現に問題になつて居るのは「ちは
や」といふ言葉であります。神の枕詞に「ちはやふる」あらぶる」といふ言葉があります。枕詞から神様を
見ると我が國には善神と悪神とあつて、悪神に限つて「ちはやふる」「あらぶるかみ」といひ、善い神は
「みたまふる」とか、「かゝふる」とかいふ。善神の場合には私に福を授けて下さい、悪しき神様には御馳
走するから向ふに行つて下さい、私の方に来ないやうにして下さいといふ。其「ちはや」といふ言葉は是
は日本の國學者の間に問題になつて居る。「ちはや」といふ言葉はどういふものでありますか、是は藤貞
幹が衝口發の中で論じて居ります。私は其説が一番宜いと思ひます。「ちはや」といふのは一つの衣服で
あります。是は極めて神聖なもので、神様に仕へる者でなければ着られないものと、藤貞幹がいつて居
ります。服飾學者のオーソリティーといはれる櫻井秀君が最近歴史地理誌上に於て是等の學説を發表されて居
ります。それにあります、領巾振山の故事を殘した領巾は、服飾の上にて矢張りマジツク的のもので、
斯ういふやうな衣服を着た人はどうも變つた民族であると私は考へて居ります。同時に能く問題になりま

す栲衾新羅國などいふ此栲といふものが日本の國の原産物ではない、南洋のもので日本に渡つて來たものに相違ない。此栲といふものを織り若くは着物として居つた者は日本の原始民族ではなく中途渡來した異民族と考へて居ります。

第六に考へて見たいことは殆ど今日では見ることも出來なくなりましたが、近くは婦人、古くは男子まで致したお齒黒女の土俗であります。齒黒を附けるのは神后紀の中に菱齒といふことがあるとて、山東京傳の弟の山東京山は神后時代に日本に齒を染める風俗があつたといつて居りますが、是は信することが出來ない。是は御承知の通り山海經に東方に黒齒國ありとあるのは、學者連がそれは日本であらうと言ふてゐますが、是もなか／＼信じられない。然し兎も角も日本に齒を黒くする風俗があつたといふことは事實です。何が故に齒を黒くすることを往古に發明したか、是に就てはいろいろ説がありますが、その中で有力な説は矢張り吾々の遠い祖先の一民族中に椰子の實を喰つて齒が黒くなつた者がある、それは南方民族の中に椰子を喰ふ爲に齒が黒くなつた其民族が日本に來て土着するやうになり日本に齒黒女の土俗があつたといふ説が、齒黒女のいろ／＼の説の中で一番穩當の説であらうと私は思ひます。

第七は農業と土俗の關係です。即ち農業の上に現れた異民族は土俗の方からどういふ風に見なければならぬか、是に就て論じなければならぬことは祈年祭でございます。日本に於ては古く穀物の無かつた所へ穀物が輸入されて「たなつもの」として即ち吾々の祖先が是に依て生命を繋いで行つたといふのでありま

すから、最も貴重なものとして尊ばれた。いふまでもなく今日吾々の平氣で使つて居る年といふ言葉の語源なども、日本書紀傳を見ますと年は即ち稻の古語が段々と轉じて行つたものだといふことをいつて居りますが、當る當らぬは兎も角も少くも「たなつもの」が吾々の祖先に尊ばれたことはいふまでもない事です。

是から尾籠な話になるのですが、暫く堪へて貰ひまして、不都合であるから止めろといふことでありますれば止めますが、農業と土俗の話では已むを得ませぬ。それは先づ血液を農業に於て珍重したことが文獻の上から見られることです。そして之は古語拾遺、播磨風土記に明かに書いてあるのであります。穀物の種子を蒔く場合に血液の中に種子を浸して置くことが我が日本の土俗としてあつたのであります。是は餘ほど注意をしなければならぬことです。血の中に種子を浸す若くは施肥としていろ／＼の獸の肉を使つたといふことであります。是は最前申しました穀物の神様の問題に觸れて居ること、思ひます。更に穀物の神様が殺されるといふことに關係してリングー崇拜、即ち陽物崇拜といふ問題があります。尙ほ其前にちよつと申しますが、祈年祭と農業の關係といふのは延喜式を見ますと廣瀬の祭、龍田の祭といふやうに農業に關する澤山の祝詞がございますが、其中の唯だ一つ祈年祭の祝詞に限つて使はれて居る言葉がございます。それは何かといふと、神様に獻げる白き猪といふことが書いてあることです。祈年祭に限つて白き猪を穀物の神様に獻げるといふことがあります。然して此祈年祭に白き猪が重要なものであるといふこ

とは臺記といふ本がございますが、近江國から白き猪を年々獻る、白き鶏は京都から獻るといふことが明記してございますが、近江の國司から白き猪を獻ることが出来ないから朝廷では白き猪が取れなくては祈年祭が出来ぬといふことで、幾度となく延期したとあります。又以て如何に白き猪が重要な位置を占めて居つたかといふことが明かであります。

農業と血液との土俗に就てリンガー崇拜といふことがございますが、リンガー崇拜に就ては此處に御出の方は御承知ない御方がございませうが、要するに男子の前の物を神様として拜むといふ洵に不純不潔な思想であります。日本の古き一部の學者は斯ういふ事が扶桑略記の中に書いて居ります。天慶年間に京都の市中に陰陽を神として祭りしことを記し、その一節に近時之を異とすとあるのを捉へて、リンガー崇拜は此頃から始まつたものであらうなご、云ふてゐますが、私の考へるところでは天慶年間よりはズット古い年代から農業の神事と關聯して行はれて居たものと信じてたい。唯石器時代の石棒がリンガーであるかどうかといふことは別問題と致しまして、何が故にリンガー崇拜といふが如き不純不潔の信仰を見るに至つたかといふと、是が農業の祭と非常に關係するといふことは、土俗の方面から各地に行はれて居る農業祭を見るに、「おまらまつり」若くは「へのこまつり」といふ極端の言葉をして斯ういふ猥らな物を持出す。農業の祭は往々リンガーの祭であります。後には淡島様とか何とかいふものが出来まして、女の前の病には淡島様を拜むと宜いとかいふのは後の事で古いものではないのであります。穀物の神様が殺される

といふことは是は穀物の種子を蒔いて一遍芽をふいて成熟して蒴り取られるといふことを殺すといふことに考へ、殺しても亦更に芽をふくやうに生殖をするやうにといふことで、此人間の生殖といふことを穀物の生殖に持込んで茲に農業の祭とリンガー崇拜と結び附いたものであらうと考へます。更に最近柳田國男先生によつて發表されたのでありますが日本に於ける「おなりご」の傳説、是は土地に依りますと「ひるま持ち」ども申しますが、五月の田植をする「おなりご」を殺したといふ研究であります。先年文部省から發行された俚謠集といふものがあります、これは日本中の俗謠を集めたもので是に「おなりご」思想、「ひるま持ち」の思想が現れて居ります、古く田の神様の生贄として一人の女を殺したといふ斯ういふ思想を有つて居る人間は純粹の日本民族でなくて矢張り一つの異民族であらうと考へます。

第八に考へて見たいことは結婚といふこと、日本の土俗、是などに來ると澤山の材料を有つて居るので、澤山御話したい位であります、是ばかりに力を入れることは出來ませぬから大略に致します。婚姻といふことは人生の大事であります、是にどういふ風な事が異民族の間にあつたかといふことは注意して見なければならぬ。先づ婚姻の場合に火を尊重することです。江家次第といふ本がありますが、是は宮中の事を書いたことでありますから、吾々平民の土俗ではございませぬが、斯ういふ事が書いてある。婚禮の晩に向ふから火を持つて來る、此方から火を持つて行く、そして其の火を一つに合はせる、此火といふものが合はなければ婚姻の儀式は成り立たぬと記してあります。更に是はそれとは方法が違ひますが、

各地方で婚禮の晩嫁さんが來ると、松明の下を潜るとか、土地に依ると其松明を跨がせるといふことがある。是は嫁といふ者は骨が折れるものである、火の中にも這入る覺悟を要するといふ倫理的觀念を與へるものだと申しますが、是はいかぬ。松明を使ふので、是は後の道學者が附けたので本當の思想はさういふことではない。何となれば御承知の通り黃泉戸喫といふ一事に見るも明白です。伊邪那岐、伊邪那美命が仲違ひして、伊邪那美命が出雲國へ御出になつた、其時に伊邪那岐命、即ち脊の神様が追ひかけて參りますと、妹神即ち伊邪那美命の仰しやるには、なせもツと早く來て呉れ給はなかつたか、私はもうあなたが生へに來て下すつても、あなたと一緒に高天原へ歸ることは出來ない、それは何故であるか、私は黃泉戸喫を致しました。即ち黃泉戸喫といふことは或異つた民族の人と同じ火を以て炊いた飯を喰へるといふことで、詰り同じ鍋の物を喰へました、もうあなたの側に行くことは出來ませぬといふことである。此黃泉戸喫の手近の例だと思はれることが今に全國の婚禮に遺つて居る。それは何であるか、婚禮には夫婦が同じ釜で炊いた飯を喰はなければならぬ、是は一つの黃泉戸喫である。其飯は土地々々に依て違つて居る。或は嫁の高盛りなどいふことをやる。私の生れた足利地方中には度胸の宜い嫁さんがあつて高盛りの御代りをしたなどいふ話があります。これは江家次第に載つて居る火を貴ぶといふ思想と同じ流れに出たこと、思ひます。

それから結婚に血を啜るといふ土俗が行はれて居ります。現に今日でも羽前國東田川郡の地方に參りま

すと、婚禮の晩に女は右の手、男は左の手の無名指から血を少し出しまして、兩方の血を合せて盃へ入れて飲む。即ち血を啜るといふことが今でも婚姻の場合に遺つて居る。斯ういふやうに血を啜つて夫婦の誓ひをするとか、又は血を啜つて兄弟分の約束をするとかいふことは、是は日本の純粹の土俗でなくして必ずや異民族の土俗であるを考へたい。然してさういふ土俗を傳へて居る所は可なり世界に多いのであります。御承知の通り臺灣などにも現に遺つて居る。更に此場合に注意して見たいことは日本に割禮の土俗があつたかどうかといふ問題です。然して私はどうもあつたといふことに解釋したい。今日では吾々が十五歳になつて男になるといふ土俗は混びてしまつたが、昔ならば元服祝ひ、全く無用の事のやうであります。昔は是がなかく重大な意義を有つて居つたのであります。男になる、即ち前髪を剃りて角を入れる。女は鐵漿を附けて一人前の女になる、肩を下ろす、其場合に割禮といふことが行はれはしないか、現にさういふやうな事を調べると各地にヘコー——即ち禪祝ひといふものがある。近くは茨城縣水戸にも遠くには薩摩にも遺つて居ります。男は十五になると禪を附ける。——禪を付ける民族も注意しなければなりません。その時に親族知己から赤い禪を送る、これは割禮といふことの古い名残りではあるまいかと思ひます。それと同時によく世間で氏子の特徴といふことを申します。即ち己れは神田の明神の氏子で左の方に曲つて居るなど、いふことを申しますが、獨り東京ばかりではない。河内國の茄子作といふ所の氏子は己れの前のものは右の方に曲つて居るといふ。然して斯くの如き氏子の特徴は日本には諸方にある。此氏子

の特徴といふことも、その起原に溯れば割禮といふものが昔行はれたのではなからうか、若し日本にも割禮が行はれたならば、それは變つた民族ではあるまいか、是は現に南洋の方に參りますと、爪哇、スマトラ若くは日獨戦争で日本の領土になりましたマーシャル、カロリン群島に參りますと蠻族の間に割禮が遺つて居ります。私は氏子の特徴、ヘヨ祝といふやうなことは割禮の名残りではないかと思ひます。

それと同時に日本人の中に古く人間を喰つた民族がありはしなかつたかといふことです、是は信仰の爲に喰つたか若くは其肉が甘くて喰つたか、兎に角人間を喰ふといふ土俗がありはせぬか、是に就ては私共の先輩で土佐の海南中學に居ります、寺石正路氏が夙に此研究をなされてゐて、既に食人風俗誌といふものを書いて日本の古代民族中に人肉を喰つた者がある、神様に人身御供を上げるといふのは人間が人間を喰ふた證據だといつて居る。私は直に寺石氏の説に賛成するものでもなくして人身御供に就ては一種別な考を有つて居るのですが、食人の土俗だけは寺石氏の説を承認致します。更に現在でも此名残りが沼津に行はれて居る。沼津では死人があつて火葬すると、身寄の者は焼いた骨を口で嚙るといふことが遺つて居るといふことを私も聞いても居ります。そして此食人民族は云ふまでもなく日本の原始民族とは違つたものと思ひます。

第九は婚姻があれば出産があるのは當然のことで、是に就て第一に思ひ起されることは掃部即ちカニモリの土俗です。是は古語拾遺にあります、お産があると産婦の周圍に蟹を這はせる、それを帚で掃く役

をカニモリといふと書いてございます。其掃部といふ産婦の周圍に蟹を這はせる土俗が今でもあるかといふと、是は現に明かに琉球に遺つて居るのであります。琉球の書物を見ましても、琉球の人に聞きましても現に行はれつゝあるのです。此掃部といふ土俗があるのは日本の純粹の民族でなく變つた民族と考へられます。それから同じ出産に關し能く日本の神々が子供を産む時に蛇になるといふことがあります。御承知の通り日子火々出見命でございましたか、妃の玉依毘賣命が子を産む時に見ないで貰ひたいといった所が、火々出見命が隙穴から見た所が蛇になつて居つた。所謂匍匐委蛇即ち、大蛇になつてのたうち廻つて居るのを見て驚いた。驚くと同時にその産婦が海宮へ逃げ歸つてしまつた。此神様がお産をする時に蛇になるといふことはどういふ譯であるか、是は獨り火々出見命の場合のみでなく、他に澤山に蛇になつたといふ話を知つて居ります。一々申上げることが出来ませぬが、これは私が土俗の方面から見、日本に類のなかつた横産といふお産の仕方だらうと思ひます。横になつて子供を産むといふ土俗を有つて居つた民族を暗示したものと考へます。といふのは斯ういふのが例が澤山あるのです。その中でも因幡國の高草郡の横枕村といふ村が今でも残つて居りますが、斯ういふ事が因幡誌といふ本に書いてございます。それは外の土地では蹲踞して子供を産むが、此横枕村では横になつて産んだので此名を負ふたのである云々。私の解釋では蛇になつたといふのは横向になつたので、變つた民族の一土俗と斯う考へて居るのであります。隨て横になつてお産をすれば蛇とも見えるでせうし、随分淺ましい姿になつて見える、それを隙見し

た神様が驚いて聲を立てるといふことはあり得べき話であります。

それから斯ういふ土俗があります。それは出産と白との關係です。これは如何にも取り合せが奇抜ですが、女房がお産をする時に亭主が白に御祈りをするのです。餘り飛離れてゐて三題噺のやうでありますけれども斯ういふ土俗が確かに遺つて居る。極古い所では景行紀に此事が書いてある。景行天皇が大碓小碓といふ御兄弟の御子様を御設けになつた、此御兄弟は後の仲哀天皇と日本武尊であります、此大碓小碓の双生兒を御設けになつた時に、景行天皇が白に向つて雄叫して曰く、何が故に吾れに双生兒といふ恥辱を興へたといふことが書いてございます。さうすると此當時から白とお産といふものには土俗的關係があつたこと、思ひます。現に各地に行はれて居りますが、妻の難産の場合に亭主が白を脊負つて家の周圍を廻るといふ土俗が遺つて居ります。此白と出産といふやうな特別な土俗を有つたものは私は一種變つた民族ではあるまいかと思ふ。段々と話が嫌やなことになつて來ました。

第十は葬禮と土俗といふことでありますが、どんな風な土俗が遺つて居るかといふことも見て置きたいと思ひます。最前も申しました通り墳墓の上に神社を建てた所の民族の信仰した神は、決して死の穢れを嫌つた我國の神様とは同一でない。若し死を嫌つた神様ならば神社を其處に建てる筈がない。死の穢れを嫌ふ神様と死の穢れを嫌はない神様と信仰をされて居つたらうと私は思ふのであります。それから是はさうも少し奇抜過ぎる例でございますが、死體の保存といふことに就ての土俗、現に今はやかましくなつて

居るでありませうが、アイヌには行はれて居つた。腹部を裂くか肛門から手を入れまして臓腑を引出して其死骸を床の間に飾つて一年の間水を掛けて置く。是が私達の關東に今でも遺つて居る。死體から臓腑を引出すといふやうな事は迎も出来ませぬから、さういふ風な意味で死體を保存するといふことは許しませぬから、その代りに、人間が死にますと其肌に附けました衣服を蔭に吊して置く。さうして四十九日の間水氣が切れぬやうに水をかける。之を七日晒しどいつて居りますが、是はアイヌの遺した死體保存の傍が遺つて居るのではなからうかと思ひます。それから注意しなければならぬことは死體を埋めることではありません。墓を築くといふ言葉の上からいふと、決して土地を掘つて埋めるものではない。築くといふからは土を盛りあげねばならぬ。是が即ち築くといふ意味合でございます。斯ういふ風なことが今まで採つた方法で又穴を掘つて埋めたといふ一つの別の方法もあつたと思ひます。又同じ穴を掘つて埋めるにも、死體を屈曲させて埋める方法と、其儘横臥させる方法とあります。是も信仰上注意しなければならぬ。人間を窮屈にして再び亡靈として出ることを許さないぞといふのと、その反對に、腕も足も長々と埋めるといふ方法もあります。是も異民族として遺した方法ではないかと思ひます。

尙ほ注意して見たいことは日本にも墓を暖めるといふ土俗のあつたことです。今日でも盆の迎ひ火とか送り火とかいふことを致します。あれは佛教の方の思想からばかり來て居ると御思ひの御方がございませうが、全體日本の國で七月十五日に亡靈を迎へて祭をするのは是は私等の考では佛教の思想ではなく佛教

の渡る前の原始思想があつたのではなからうかと思ふ。何となれば枕の草紙にも袖中抄にも東國に於て十二月と七月とに御靈祭をする風俗があつたが、近年は十二月に祭をすることが無いと記してある。今日でも行はれて居る生御靈の祭事を益に矢張りやる、兩親を有つて居る者が其兩親の生きて居る靈を祭る、先祖の亡き御靈を祭るといふこと、此思想が私は佛教の思想でなくして佛教渡來以前から遺つて居る所へ後に佛教が渡つて來たので佛教に習合されてしまつたのではなからうかと思ふ。それと同じやうに必ずしも佛教の思想とばかりいひたくない、是も日本の一種の原始思想ではなからうかと思ふ。といふのは和名抄の中に送り火の場合に門火といふことが書いてございます。其註釋に周禮を引いて儒禮である、儒者の教へであるといふことが書いてあります。それで私達の考では門火といふものも本來は儒者の教へが來ない前に日本にあつたのではなからうか。人間は生きてゐる間は濫かい、それであるから墓を暖めたならば其死骸が暖かくなつて靈魂が再び吾々に見えて呉れるかといふやうな、原始的の思想で墓地で火を焚くといふ土俗になつたのではないかと斯う考へる。何となれば墓で熾んに火を焚く土俗が現に各地に行はれてゐるので、それから結論してもさういひ得るだらうと思ひます。此外申上げますと非常に澤山ございます。殊に葬禮と土俗といふことは澤山例がございます。例へば弓を持つてお葬ひに行かねばならぬといふ是は面白い事だと思ひます。吾々の先輩の後藤朝太郎君は漢字の研究をやつて居りますが、其人の説では弔といふ字は人間が弓を持つて行く形象文字で、弔に弓を離すことは出來ぬ、人間が葬禮の場合に弓矢を持つて行くことから來て居るといつて居ります。本當に弔に弓を持つて行く文字に適つた土俗を遺して居るの

は土佐國長岡郡豐永郷であります。土佐群書類從に精しく書いてございますから御覽を願ひます。それから又棺に限つて意口から出す、又或土地に於ては棺に瓢箪を附けて出す。斯ういふ事はなか／＼澤山ございますが、大體にして略することにしますが、生御靈を祭るといふ思想を有ち、さういふ材料を遺した所の民族は私達の本當の祖先でなくして、或は他から來た異民族の仕業ではないかと思ひます。話が十分切れ／＼になりましたが、是から結論に這入ることに致します。

以上私が列擧するやうに日本の民族は少くも十以上の民族から成つて居るのであります。然しながらこゝに特に注意しなければならぬことは、土俗が相違してゐるからとて、直ちに民族が相異してゐるとは言ひ得ぬ場合のあること、更に是等の土俗を一々比較土俗學の立場から説明すると、一層興味の深かつたに相違ないといふことです。此の二つは結論を急ぎますので大略にしてをきます。然してどうして斯ういふ變つた民族が集まつたに拘らず我が國は世界に其比を見ない國體を成すことが出來たであらうか、是は餘ほど吾々が研究しなければならぬのであります。さういふ風に變つた民族が統合したに拘らず今日の立派な國體を成したといふ其理由は何處にあるかといふことは研究しなければならぬが、是はいふまでもなく我國に三千年來君臨して居る皇室の御稜威に依ることは無論であります。次に風土の關係、氏族の關係であります。尙ほ日本の學者は日本のうからやから氏族の關係から氏姓の研究を要しますが、此氏姓の下に日本に於て團結しました團體力といふものが何百年、何千年に互つて涵養されて此氏族といふものから出て後に行はれた家族制度、風土及び同化力等に依て今日のやうな渾然融和した一つの日本民族を成したことを存じます。洵に詰らぬ事で長らく清聽を汚しました(完)